

(フォーラム報告)

マイケル・サンデル型授業で教員や学生がどう変わるか
— 燦結成1周年記念イベント「京都産業大学にとって白熱教室とは？」の取組を通して—

林 隆二・伊藤 琴音・南 太貴・乙倉 孝臣・山内 尚子

高等教育フォーラム 第3号抜刷 平成25年3月

マイケル・サンデル型授業で教員や学生がどう変わるか

—燦結成1周年記念イベント「京都産業大学にとって白熱教室とは？」の取組を通して—[†]

林 隆二*・伊藤 琴音*・南 太貴**・乙倉 孝臣**・山内 尚子***

京都産業大学法学部3年次*

京都産業大学経済学部2年次**

京都産業大学学長室***

2012年6月29日に、ハーバード大学マイケル・サンデルの教授法を題材に、燦結成1周年記念イベント「京都産業大学にとって白熱教室とは？」を、学生FDスタッフ「燦(SAN)」の企画運営により実施した。質の高い学士課程教育が求められる中で、学生の主体的な学びをどう促すか、マイケル・サンデルのような大人数による双方向型授業を導入することにより、教員は教授法をどのように工夫しなければならないのか、履修する学生の姿勢はどう変わらなければならないのか、参加した学生・教員・職員はどう変わろうと思ったのか。本稿では、燦の企画から終了後の振り返りまでの活動記録と、今後の課題と展望について報告する。

キーワード:学生の主体的な学びの促進、双方向型授業、事前準備・学習、学生FD

1. はじめに

京都産業大学が、2010年度に開催した「第1回学生と教職員が共に考えるFDフォーラム」にて、教員が考えるよい授業とは「授業の内容(コンテンツ)がよい授業」、学生が考えるよい授業とは「授業の教え方がよい授業」と、両者の「よい授業」に対する考え方に差異があることが明らかになった。これをきっかけとし、授業改善には学生からの意見が必要との問題意識から、本学では、昨年6月に学生FDスタッフ(愛称:「燦(SAN)」)を結成し、現在45名の学生が活動している。

2012年6月29日に、マイケル・サンデルの教授法を題材としたイベント「京都産業大学にとって白熱教室とは？」を燦の企画運営により実施した。本稿では、質の高い学士課程教育が求められる中で、学生の主体的な学びをどう促すか、マイケル・サンデルのような大人数による双方向型授業(以下、「マイケル・サンデル型授業」という)を導入することにより、教員は教授法をどのように工夫し、履修する学生の姿勢はどう変わらなければならないのか、そして参加した学生・教員・職員はどう変わろうと思ったのかについて、今後の課題を踏まえ報告する。

2. 目的と概要

本イベントの目的(2.1)と概要(2.2)、実施に際し工夫

した点(2.3)を述べる。

2.1. 目的

- ①マイケル・サンデルの白熱教室を題材とし、本学で行われている授業との違いを明らかにする。
- ②マイケル・サンデル型授業に対する認識や価値観について、学生・教員・職員が互いの立場を超えて意見交流を行う。
- ③学生・教員・職員が現行の授業に対して、何を感じ、何を求めているのかを明らかにする。

2.2. 概要

・日時:2012年6月29日(金) 16:45~18:45

・場所:5号館ロビー

・主催:学生FDスタッフ「燦」

・協力:教育支援研究開発センター

・参加者数:計96名(動員目標:60名)

(内訳:本学学生62名、教員15名、職員19名)

・プログラム:

16:45~ 開会宣言・燦代表挨拶

17:00~ マイケル・サンデル型授業に関する予習

17:20~ シャベリ場のルール説明

17:25~ シャベリ場

「京都産業大学にとって白熱教室とは？」

18:25～ 全体での意見交換・共有

18:40～ 教育支援研究開発センター 佐藤賢一副センター長からのコメント

18:45 閉会挨拶・「共創シート」記入

2.3. 実施に際し工夫した点

昨年度に実施した『京産共創』プロジェクト—京都産業大学をどう創っていくか—の成果から、本学の将来について学生・教員・職員が語れる場の「継続」と、帰属意識や参加意欲の「中間層への拡大」を、今年度の燦の活動の方向性として位置づけ、活動を行っている。今回のイベントでは、それらを「場」の設計や、プログラム編成に反映し実施した。

2.3.1. 「場」の設計

今回のイベントの会場は、帰属意識や参加意欲の中間層への拡大を意識し、特に一般学生や教職員の通行量が多く、ガラス張りのオープンスペースとなっている5号館1階ロビーを選んだ。

動員目標を60名と設定し、参加にあたっては、しゃべり場のグループを所属・教職学のバランスよく編成できるようにするため、事前申込を原則としていた。

しかし、今回のイベントでは、参加者層の拡大を狙い、当日の飛び入り参加がしやすい雰囲気の醸成に努め、人通りが一番多い会場入口付近に、マイケル・サンデル関連の書籍とDVD上映を、燦の学生が制作した作品紹介のプレートと共に設置した(図1参照)。



図1. 「場」の設計①
マイケル・サンデル関連の書籍とDVDの展示

さらに、受付からしゃべり場、全体での意見交換・共有まで、イベントが全て1つの会場で完結するよう設計し、しゃべり場では、大半のグループが、ガラス張りの壁に貼られた模造紙に向かって議論するようにした。このこと

により、学生・教員・職員が楽しく活発に意見交換をする表情が、建物の外からも見える場の設計となっている(図2参照)。

全体の意見交換・共有の時間もオープンスペースで行うため、実際に会場に入って参加しなくとも、議論の内容や雰囲気が伝わるようになっており、燦の活動内容の一端を一般学生にも知ってもらうことができ、今後、学内で継続して活動をしていく上でも貴重な機会となったと考える。



図2. 「場」の設計② ガラスを壁にしたしゃべり場

2.3.2. プログラムの編成

今回のイベントでは、「マイケル・サンデルの教授法」という狭義かつ具体的なテーマで議論することとなっていたため、参加者間でイメージを共有し、前提知識をある程度持っておく必要があった。そのため、①「はじめての白熱教室」の参加者への配布、②マイケル・サンデル型授業に関する全体での予習時間を設けた。

①「はじめての白熱教室」は、マイケル・サンデルの白熱教室を初めて知ったという参加者向けに、イベントを機に書籍やDVDで事前学習をした燦の学生が、マイケル・サンデル型授業の概要・特徴や、自身の感想をわかりやすくまとめた資料である。当日の配布資料として参加者へ渡し、開始前の時間に読んでもらえるように工夫した(図3参照)。

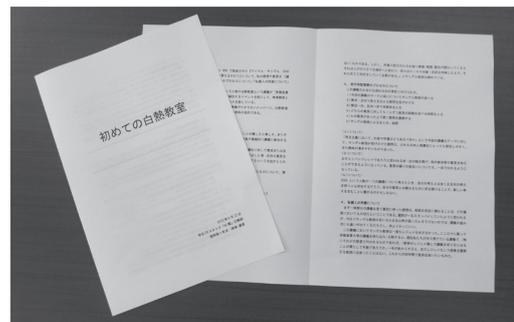


図3. 初心者向けに作成された「はじめての白熱教室」

イベントのプログラムには、②マイケル・サンデル型授業に関する全体での予習時間を設けた。イメージを共有してもらうため、NHK「ハーバード大学白熱教室」の映像の一部を放映し、燦の学生による「マイケル・サンデル型授業」に関するポイントの解説を行った(図4参照)。



図4. マイケル・サンデル型授業に関する全体での予習時間の様子

その後、8つのグループに分かれて、しゃべり場を行い、「白熱教室を受けてみたいか」、「マイケル・サンデルのような双方向型授業を行うには、教員の教授法や受講する学生の姿勢はどう変わらなければならないのか」等といったテーマで活発に意見を交換し、大学の授業のあり方、学生・教員の参加の仕方等について議論を行った(図5参照)。



図5. しゃべり場の様子

最後には、マイケル・サンデルの白熱教室を模した形式で全体での意見交換・共有を行い、学生からは、「こういった討論型の授業をもっと取り入れてほしい」といった意見や、教員からは、「事前学習をしっかり行い、前提知識を身に付けてから授業に臨んでほしい」等といった意見が出された(図6参照)。



図6. マイケル・サンデルの白熱教室を模した全体での意見交換・共有の様子

3. マイケル・サンデル型授業で教員・学生はどう変わるか
もし、本学にマイケル・サンデル型授業を導入するならば、教員は教授法をどのように工夫し、履修する学生の姿勢はどう変わらなければならないのかについて、イベント終了後に実施したアンケート調査(以下、「共創シート」という)およびしゃべり場(8グループ)で出された意見について、燦で振り返りを行い、参加者の意見を集約・整理・分析した。

3.1. しゃべり場に出された意見に基づく分析

3.1.1. 教員に求められる教授法の工夫について

マイケル・サンデルの教授法に肯定的な意見を持つ学生からは、彼の魅力的な部分として、「政治哲学という学問の専門的な部分・事象をわかりやすい例を用いて解説していること」が多く挙げられていた。また、「教員が意図しない発言があったとしても、直接的に否定するのではなく、学生から別の意見をうまく引き出そうとしている。これが積極的に発言しやすい雰囲気につながっているのではないか」との意見もあった。

3.1.2. 学生に求められる姿勢について

学生に求められる姿勢として、「授業に積極的に参加する意欲」と「前提知識を身に付けるための徹底した事前学習」が挙げられた。

「積極的に参加する意欲」について、教員からは「日本の学生は大人数授業で自分の考え、意見を発信することに対して消極的な学生が多い」との意見が多く挙げられ、「事前学習」については、「現状の学生では、前提知識が不足している学生が多く、事前学習を十分行った上で履修しないと白熱した議論を展開することはできない」との指摘があった。

表1.: 学生・教員・職員別「共創シート」結果の一覧(学生N=39、教員N=13、職員N=13)

I. 回答者属性調査	学生	教員	職員
I-I. 産大帰属意識	3.74	4.59	4.62
1 京都産業大学が好きだ	4.08	4.54	4.69
8 京都産業大学の学生が好きだ	3.41	4.64	4.54
I-II. シャベリ場適応度	3.55	3.38	3.88
2 初対面の人と話すのが好きだ(学生の頃好きだった)	3.67	3.38	4.00
4 自分は積極的に自己表現するほうだ	3.44	3.38	3.77
I-III. 大学運営モチベーション	3.64	3.88	4.56
3 以前から大学に関してなにかしたいと思っていた	3.77	3.67	4.67
10 京都産業大学に貢献するのは京都産業大学の構成員の義務だと思う	3.51	4.08	4.46
I-IV. 正課活動における充実度	3.92	3.97	4.06
5 授業で学ぶのが好きだ(学生の頃好きだった)	3.69	3.85	3.92
7 好きな授業・後輩に勧めたい授業が、京都産業大学には1つ以上ある	4.15	4.09	4.20
I-V. 大講義の親和意識	4.04	3.35	4.03
6 自分は大講義(受講生200人程度から大講義とする)を受講することが多い方だ	3.49	2.69	3.38
9 これまでに大講義(受講生200人程度から大講義とする)を受けたことがある	4.59	4.00	4.67
II. イベント全体での共感度調査	学生	教員	職員
II-I. 場の価値	4.13	4.08	4.38
11 楽しかったと思う	4.15	4.08	4.38
14 参加した甲斐があったと思う	4.10	4.08	4.38
II-II. 構成員同士の親近感の増幅	3.96	4.00	4.19
12 他の参加者に対し、以前より親近感が持てるようになった	3.79	4.08	4.23
18 他の参加者の意見に、周囲の人々は共感していた	4.13	3.92	4.15
II-III. 双方向型授業への興味の喚起	4.05	3.08	4.54
13 サンデルが行っているような双方向型授業を受けてみたい	4.05	3.15	4.54
20 サンデルが行っているような双方向型授業をやってみみたい(教員のみ)		3.00	
III-IV. 授業に対する設計意欲・参加意欲の向上	3.85	3.42	4.13
15 このイベントは、今関っている授業の在り方について考え直す機会になった	3.95	3.85	4.08
16 大講義でも、主体的に授業を受けたい(授業の形式を今後の参考にしたい)	3.74	3.00	4.18
III-V. 授業への準備の必要性に対する設計意欲の促進	4.24	4.35	4.46
17 双方向型授業に参加して発言するためには、入念な事前学習が必要だ	4.13	4.54	4.31
19 双方向型授業を実施する教員は、入念な事前準備が必要だ	4.34	4.15	4.62
III. シャベリ場形態での共感度調査	学生	教員	職員
III-I. シャベリ場モチベーションの喚起	3.97	3.69	3.73
21 シャベリ場は、時間が短く、もの足りなかった	3.67	3.15	3.46
24 シャベリ場は、時間が長すぎ、途中で飽きてしまった*	4.28	4.23	4.00
III-II. テーマ設定の意義	4.05	4.11	4.13
22 他の参加者の意見は、現実味を感じられなかった*	4.10	4.08	4.08
23 異なる意見の共有は好奇心をくすぐられる	4.21	4.33	4.46
25 「京都産業大学の授業」という具体的なテーマは、身近で考えやすかった	3.85	3.92	3.85
III-III. 相互理解の促進	4.08	4.31	4.09
26 シャベリ場では、周囲の人々は互いの意見に耳を傾けていた	4.38	4.54	4.33
27 シャベリ場では、自分の思っていることを他の参加者に伝えられた	3.77	4.08	3.85

※表中、最も左の列のアラビア数字は設問番号(掲載順に付与)を示している。

※数値は、各項目の平均値であり、4.00以上をゴシックで、4.50以上をマーカーで示している。

※設問末尾に*が付与されている項目は、反転項目である。

3.2. 「共創シート」から得られたデータに基づく分析

「共創シート」は、全33設問を、「5. 共感する」～「1. 共感しない」までの5段階で評価する5段階評価調査部分と、全3設問の自由記述部分から構成した。本稿ではその結果から一部を抜粋して報告する(表2参照。全設問の集計結果については、表1参照)。

表2 学生・教員・職員別共創シート結果(一部抜粋)
(学生N=39, 教員N=13, 職員N=13)

II-III 双方向型授業への興味の喚起				
Q13	サンデルの行っている双方向型授業を受けたい			
※右の数値は群別の評価値の平均である。以下同。		学生	教員	職員
		4.05	3.15	4.54
Q20	サンデルの行っている双方向型授業をやってみたい(教員のみ)		3.00	
III-IV 授業に対する設計意欲・参加意欲の向上				
Q15	本イベントは今関わっている授業のあり方について考え直す機会になった	3.95	3.85	4.08
III-V 授業の事前準備の必要性に関する認識の促進				
Q17	双方向型授業に参加して発言するためには、入念な事前学習が必要だ	4.13	4.54	4.31
Q19	双方向型授業を実施する教員は、入念な事前準備が必要だ	4.34	4.15	4.62

調査項目II-IIIの双方向型授業への興味では、職員が4.5、学生が4.0を超えており、関心が高いことが分かる(Q13)。一方、教員の双方向型授業を実際に自身が行うことへの意欲は、それぞれの専門分野によって、この教授法が適さない等の理由から、個人差が激しいことが推察される(Q20)。

調査項目III-Vの事前準備・学習の必要性では、評価がいずれも4.0を超えており、マイケル・サンデル型授業を行うには、教員にも学生にも授業の事前準備・学習が必要不可欠であるとの認識を共有することができたと言えるだろう(Q17, Q19)。

自由記述部分では、「本学でマイケル・サンデル型授業を実施するならば、(a)教員は教授法をどのように工夫しなければならないか、(b)履修する学生の姿勢はどう変わらなければならないか、(c)本イベントに参加して、自身で『こう変わろう』と思うことはあったか』について回答を求めた。

(a) 教員に求められる教授法の工夫について

学生からは、「手を挙げやすい雰囲気づくりやユーモア」、教員からは、「TA等を配置し、課した事前学習を確実にする仕組み」、「テーマの絞り込み、質問力を上げる」ことが必要との意見があった。

(b) 学生に求められる姿勢について

学生からは、「積極的に発言する力、勇気」、「事前学習を行う、平日頃から問題意識を持つ」、教員からは、「受動的から能動的に」等の意見があった。

(c) 自身で「こう変わろう」と思ったことについて

教員からは、「授業の構成を根本的に変えることを検討しようと思うようになった」、「これからも双方向型授業を意識しながらやっていたと思う」と等の前向きな意見があった。

学生からは、「先生に挑戦する勇気」や「他者の考えを受け入れること」が必要、職員からは、「大学の講義に興味を持つ」ことが必要等の意見があった。

Q15の結果にも表れているとおり、本イベントが、学生・教員・職員共に授業のあり方について考え直すよききっかけになったと考えられる。

4. 今後の課題と展望

本イベントを通して、マイケル・サンデル型授業には、学生、教員共に入念な事前準備・学習が必要であるという共通認識のもと、教員は、学生の意見を取り入れながら進める授業運営、学生は、積極的に発言し参加意欲を高めることが重要であることが明らかになった。

今後は、例えば、学生に積極的な発言を促すには、教授法にどのような工夫が必要か、学生に事前学習をどのように提示するとよいか等の具体策についてもう少し議論を掘り下げる必要があると考える。

今回のイベントで、特徴的だったこととして、本イベントに参加した学生のうち、1年次生の割合が高かったことが挙げられる(表3参照)。

表3 参加者内訳(学生:学年別)

年次	一般参加	燦(SAN)	合計(学年別)
4年次	9	6	15
3年次	7	8	15
2年次	8	4	12
1年次	15	5	20
合計	39	23	62

本イベントの参加者が、入学後3ヶ月未満、かつ、平日5限目の時間帯に実施した課外のイベントにも関わらず、予想以上に1年次生の参加が多かったのは、何故だろうか。1年次生の参加が多いにも関わらず、「共創シート」の結果から、本学への帰属意識が、昨年12月に実施した「燦 presents『京産共創』プロジェクト」の結果よりも高くなっ

ている。それは、本学への志望度が元々高い学生が本イベントに参加したことによるのか、それとも、本学が1年次生対象に注力している、初年次教育やキャリア教育の効果が、こういったイベントへの参加意欲に繋がっているのだろうか。今後は、その因果関係に注目し、さらに調査を進めていきたい。

燦が中心となり、学生・教員・職員が共に考え、意識を共有する場と機会を提供し、実践事例や意見を収集、分析、提案しながら、京都産業大学流「白熱教室」が実践され、本学の教育の質向上の一助となることを期待する。

謝辞

日頃より「燦」の活動をご理解、ご支援いただいている藤岡一郎学長をはじめ、授業時間内広報にご協力くださった先生方、ピア・サポーター、志学会執行委員会等、学生団体の皆様、ご多用のところ参加して下さった96名の学生・教員・職員の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

【学生FDスタッフ「燦(SAN)」メンバー】

- ・林 隆二 (法学部3年次) :「燦」代表(本イベント時)
- ・南 太貴 (経済学部2年次) :「燦」代表(現在)
- ・伊藤 章達 (経済学部4年次)
- ・岩倉 一憲 (経済学部4年次)
- ・川崎 悠 (外国語学部4年次)
- ・黒田 大輔 (法学部4年次)
- ・杉本 眞理 (法学部4年次)
- ・関戸 俊輔 (経済学部4年次)
- ・妹野 雄貴 (法学部4年次)
- ・曾我 好雄 (経済学部4年次)
- ・玉川 黎 (経済学部4年次)
- ・中島 直行 (法学部4年次)
- ・永山 岳 (経済学部4年次)
- ・藤井 篤 (経営学部4年次)
- ・三笠 裕馬 (経済学部4年次)
- ・吉田 天平 (理学部4年次)
- ・伊藤 琴音 (法学部3年次)
- ・片山 良平 (法学部3年次)
- ・久保田茂樹 (経営学部3年次)
- ・雑賀 一成 (文化学部3年次)
- ・芝山 侑希 (文化学部3年次)
- ・中澤 真弘 (経営学部3年次)
- ・藤井 悦子 (経営学部3年次)
- ・前川 真吾 (経済学部3年次)

- ・森廣 晋也 (文化学部3年次)
- ・山本 雄太 (経済学部3年次)
- ・飯田 菜月 (総合生命科学部2年次)※
- ・乙倉 孝臣 (経済学部2年次)
- ・清水 基弘 (経済学部2年次)
- ・田尾 直也 (経済学部2年次)※
- ・高島 琢也 (経済学部2年次)
- ・中田 美麗 (経営学部2年次)
- ・柳川 陽祐 (法学部2年次)※
- ・飯田実乃里 (外国語学部1年次)
- ・神津 茜音 (理学部1年次)
- ・坂本 由香 (法学部1年次)
- ・佐藤 啓太 (経営学部1年次)※
- ・竹谷 美里 (経営学部1年次)
- ・近持 恒平 (経済学部1年次)※
- ・林 綾華 (文化学部1年次)※
- ・伴海 大介 (法学部1年次)※
- ・福田 佳晃 (法学部1年次)
- ・堀田 直希 (経済学部1年次)※
- ・吉水 康矢 (総合生命科学部1年次)※
- ・若宮 健 (総合生命科学部1年次)※

2012年11月30日現在(学年・氏名50音順)

※印…本イベント以降に「燦」に加入したメンバー

KEYWORDS: Autonomous learning, Interactive lectures, Preparations for classes, Faculty development(FD) with student participation

2012年11月30日受理

†Ryuji HAYASHI*, Kotone ITO*, Takaomi OTOKURA**, Daiki MINAMI**, Naoko YAMAUCHI***: How Would Teachers' and Students' Roles Change with the Introduction of Interactive Lectures like Ph.D. Michael J. Sandel's Courses?

*Faculty of Law, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555

**Faculty of Economics, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555

***Center of Presidential Affairs, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555